

「がんの告知 患者の尊厳と医師の義務」

竜 崇正
寺本 龍生 編集

済生会中央病院長

末 舛 恵 一

がんの臨床、がん末期の臨床に長く携わってきた私でも、この本を読み始めると、引き入れられて全部読んしまうような所があります。たくさんの大切なことが書いてあります。私よりはるかに若い昭和43年卒の“四三会”の医師たちが、パッションとエネルギーを注入して本書を書いているからだと思うのです。

読み始めて最後まで、それこそ一気呵成に読了しました。人が重い病を得て、医療者、家族に囲まれて、そこで苦しみ、悩み、考える魂がリアルに描かれます。あの世に行ってから“皆さんありがとうと思っているか”、“でもやはり…”と思っているか、です。読みながら、書評を書くのを忘れてしまうほど、心を打たれ、自分として苦吟する所もありました。

がんの診断をして、そこでどこまで本当のことを告げるか。がんの種類によって経過の違うことがあるし、早期がんはそのとおりに告げることが多いようですが、でも患者さん本人の心の反応は、人さまざまです。私の知人の哲学の先生が、それでも頭の中が真っ白になって、早期という説明も頭に入ってこなかったという経験を語ってくれました(幸い、あとで誤診と知れ、笑いながら

話してくれたのですが)。

心が落ち着くよう時間を取りゆくり落ち着いて医師の話を聞けるような場所で…、何回も会って段々に…という心配りとともに病名や病状は説明されなければならないのです。ちなみにこの友人は、数か月の後“誤診”。当人は半ば怒りながら笑顔を見せましたが。

“がん”という言葉が、このような知識人でもこれだけ仰天させるのですから、私たち医師もこのような仕事についている以上は、並の勉強(修行といったほうがよいかもしれませんが)ではだめだと思います。告げた後の心と身体のケアを通してその人を支える努力、経験が絶対に必要です。この本は、この点についても貴重な示唆に富んでいます。

1998年(平成10年)に、末期医療に関する意識調査が健康政策研究事業として行われています(主任研究者 橋本修二氏)。一般人2,300人、病院、診療所、緩和ケアの医師2,300人、これらの施設に訪問看護ステーションを加えたナース3,100人のアンケート調査です。一般人では病名告知を望む人が女性70%、男性77%。本人に告知するという医師はわずか40%、家族に告知するは35%、本人の状況をよくみて

告げるという答えが50%で、緩和ケア施設(ホスピスのこと)でも高率とは言えないのが現実です。

私の勤めていた国立がんセンターでは、ほとんどの患者さんに告知していましたが、どうもこれは“がん”センターに来院患者さんだからできたとも考えられます。患者さんはそのつもりで来院しているからです。今いる済生会中央病院では、もっと告知率は低いのです。しかし、WHOの疼痛治療法は、医師もナースも熟知、実行しています。先のアンケートでは、この疼痛治療の中味も知っているのは、一般には50～60%程度にすぎませんでした。

もう1つ、この本には法律家によるがん告知の法的な考え方と裁判事例が記載されています。これもわれわれ臨床医の頭では想像しにくいような発想であり、参考になります。

患者の尊厳を守るためには病名や病状は告知すべきであるという理念の実現に向けて、読者も、著者たちとともにそれぞれの現場で苦闘しつつ学んでください。

● A5 頁216 図5 表8 2001
定価(本体3,500円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)